第三節 人の一生

─ 誕生とその厄

タ」などという。「クセ」に軽重がある。 妊娠 妊娠したことを、「ヤヤモッタ」「カカイタ」「大腹ニナッ

腹帯しめ(岩田帯しめ) 妊娠五ケ月目の戌の日に、晒木綿五≥腹帯しめ(岩田帯しめ) 妊娠の実母が、初生児に限り、婚家に娘を借りに来てれで、岩田帯という。熊の皮の腹帯をしめると安産するという。七尺を腹にまく、胎児の過大な成長を抑え、安産を願う心のあらわせ尺を腹にまく、胎児の過大な成長を抑え、安産を願う心のあらわれて、苦して、

出産 産室は、ナカマの北座敷にする。畳をはがし、藁などを敷き、その上に布団などを敷く、これを「サンス」(産巣) などといき。古くは、「トリアゲバアサン」が助産した。多くは座産か、寝産とので、助産した人を夕飯など御馳走をした。「オンバサマ」が老婦とのは、お産は体験を経た老婦が必要であることを教えたのである。とのは、お産は体験を経た老婦が必要であることを教えたのである。とのは、お産は体験を経た老婦が必要であることを教えたのである。とのは、お産は体験を経た老婦が必要であることを教えたのである。とのは、お産は体験を経た老婦が必要であることを教えたのである。とのは、お産は体験を経た老婦が必要であることを教えたのである。

なるとかで、つつしんだ。また兎を食うと、三ツ口に、生姜を食うかぬよう火事・洪水を見ないとか、馬の道具をまたぐと十二月子にからい。よい子を産むため、妊婦は赤アザ、青アザのつ

と「六ツロク」が産まれるとかで食べなかった。

身がかゆくなるとて食べさせなかった。戦前は出産日から二十日間出産後は、餅を食べると母乳がよく出るとて食べた。里芋は、全

位まで、

油揚・酸味のものも禁じた。

た眉毛も落とした。また、脐の緒はほして保存した。別にしたりして、なるべく産室にいて、体の回復に心を用いた。ままた、出産後二十一日間は、食事用具や便所草履などを家の人と

二 育児儀礼

(産婆)をよんで、今日までの「湯あみせ」に感謝し、取上料を払い上日夜 出生後七日目の夜に、赤飯をたいて、とりあげ婆さん

う。

父がつけたり、または他人に依頼することもある。襲名とか、貰字名づけ 出生後十四日以内に命名する。これは親がつけたり、祖

髪の毛・銭などを包んで上げる。雪隠まいり 二十一日目におまいりする。ヒネリといって、米・雪泉

とかの風習も残っている。

を持参し、招かれた客も、幼児の身につくものを祝品として贈り、・両親に対することである。このとき、婚家では四ツ身の着物など枕引き 二十一日目に行う。健康な子供を両親の伯叔父母・兄弟

宮まいり 男は五十日目、女は五十一日目に、はじめて外気にあ祝宴をする。産婆はこのとき上席に坐わらせる。

鎮守様に宮まいりをする。氏としての資格の宣言である。そし

て、

て、実家で出産した際は、両親に付添われて、婚家に帰り、初子はて、実家で出産した際は、両親に付添われて、婚家に帰り、初子は

父の鎮守へ宮まいりをする。

子守り 祖父母のあるときは、ふだんはまかせる。このとき、田子守り 祖父母のあるときは、ふだんはまかせる。このとき、田原乳くれに行くこともある。小さいうちは、「ナカヘオンブ」する

贈る。
になると、男に「破魔弓」をおくる。女子には、羽子板を祝としてになると、男に「破魔弓」をおくる。女子には、羽子板を祝として初正月祝 出産後はじめての子の正月を初正月といい、正月近く

う。

雛様」を贈り成長を祝福する。 初節供祝 初節供の三月に、男児には「天神様」、女児には、「お

なことの儀式とする。 用具を新しく求めて、食う「マネゴト」をさせ、食事が成育に大切用具を新しく求めて、食う「マネゴト」をさせ、食事が成育に大切食初め祝 誕生後の一一○日目に食初めをする。このとき、食事

負わせて、わざと倒す。これを「コロバシ餅」という。で、普通は歩行をはじめる。あまりはやいときは、米一升か餅を背初誕生祝 誕生後初の誕生日で、家内で祝膳につく。このころま

三 年祝・厄年

紐解き祝 三歳になると行う。このときはじめて、四ツ身の着物

を着せて、成長を祝福し、縁者を招いて宴を行う。

「口紅」などと着飾って、宮まいりをする。今までの成長と、今後「七草祝」として、男児は紋付袴、女児は「お振袖」に「リボン」七草祝 数え年七歳になると、正月七日の日に、縁者を招いて、

をし、今後よく勉強するようにはげます。母の家では贈物をして祝学校登り祝 はじめて小学校に入学するとき、縁者をよんでお祝

の成育の加護を感謝し祈願する。

徳円満を祈り、予祝するのである。 十三参り 数え年十三歳になると、柳津の虚空蔵参りをする。福

屋根幣をたてて、家族全員が精進した。 にお参りする。寺か堂に七日間位篭って、垢離をとって登山する。 飯豊山参り 十六歳には参拝しないが、このころの年に、飯豊山

奥の三山参り 月山・湯殿山・羽黒山へ参詣する。五穀豊穣を祈

願する神行事である。

青年が多いので、八月十五日(お盆)に挙式する。 成人の日として、十五日と定められているが、わが町は、町外在住会入りを祝福し、人としての責任を自覚させる。国家の祝日行事で 成人式 満二十歳に達すると、町において成人式を挙げ、大人の社

九歳など、女は十九歳、二十五歳、三十三歳などで、このとき神の責任を果たす重要な年齢であった。男は二十五歳、四十二歳、四十二、のとい祈祷 厄年は古くは役年であった。集落の行事について、

に体得するスタートなのである。

を下る。

して、天寿を全うするよう祝福する祝である。 年 祝 六十歳還曆、七十歳古稀、七十七歳喜寿、八十八歳米寿

(四) 婚 姻

的にもその人間的価値を認められるのである。女性とが、互いに愛しあい、信じあって深い契(血切り)を、また女性とが、互いに愛しあい、信じあって深い契(血切り)を、またなのである。この武がすんだ二人を夫婦として、社会的にも、法律をが、互いに愛しあい、信じあって深い契(血切り)を、またないである。

位置をしめ、女性は人間として最も魅力を発揮し、女の位置を十分れることである。この婚姻によって、男性は円熟した人間としての関係をもち、そして二人の人間の共同生活をすることである。関係をもち、そして二人の人間の共同生活をすることである。

はおおよそ左のようなものである。然一体に総合されていろいろな内容をもっているが、わが町の習俗然の儀式も各地によって、風土と親の願望と祝福の心などが、混

仲 人(媒酌人、媒酌人の妻を御内宝という)

介する。(どこの誰の子・氏名・年齢)新婦方へは新郎について紹する。(どこの誰の子・氏名・年齢)新婦方へは新郎について紹仲人は両人が良縁であると思うとき、新郎(新婦)方へ紹介

1

- の状況・本人等について)双方では、これに基いて相手方を調べる。(家系・財産・家庭
- ③ 双方ではこの調査によって、家庭で熟議を遂げ意志決定をす
- ④ 双方で内諾すると見合の日を定めて、当人に双方の親が付添の 双方で内諾すると見合の日を定めて、当人に双方の親が付添
- 変選んで行う。双方で結婚の意志が決定すると、仲人は定め酒の行事を吉日
- ら清酒一升と鰑一把をうけとり、新婦方へ参上する。⑥ 定め酒の日には、仲人は朝早く新郎の家に参上し、新郎方か
- 酒と鰑の半分を新郎方へ持ち帰らせる。 仲人の持参した酒の半分(五合)を鰑さかなや御馳走で飲み、ゆ人の持参した酒の半分(五合)を鰑さかなや御馳走で飲み、 新婦方では、当人の兄弟(代表)と伯叔父母が集まって待ち、
- (8) 新郎方でも兄弟、伯叔父母(代表のときもある)が集まり、

あらかじめ決めることもある。てのとき、婚礼の期日(春とか、秋とか、何月何日とか)

を

- ・ に行いた、こうらいとはことによってうこうからないです。親類目録・柳樽を持ち、品物は供に持たせて先方に行く。・ 結納日に仲人は、新郎方から結納目録と結納品・客付目録・
- ① 先方では、その品々を丁重に渡し改めたのち、受領証をうけ① 先方では、その品々を丁重に渡し改めたのち、受領証をうけ

婚礼式(新婦を迎える場合とする)

- ① 新郎方では、朝早くから,近所の人たちの手伝いをうけ、餅を
- 福を授け給うことを祈願する。
 て神に過去の御守護を感謝し、何々子と結婚する旨を告げ、幸の新郎は、早朝に起きて身を潔め、友人に伴われて鎮守詣をし
- ための予習である。このとき親疎長幼の序が定まる。新婦迎えにゆく前に御座組をする。先方で座席に誤りのない
- る(近時はこの往復、箪笥運びも自動車で行う)。て新婦方へ出立する。途中で箪笥・長持舁に会うことにしてあて新婦方へ出立する。途中で箪笥・長持舁に会うことにしてある。仲人は一切の準備ができると、新郎と内宝、見参、供を連れる。
- ⑤ 新郎の行列は先方へ着くと、仲宿で休む。

・ 仲人夫婦は、安着した旨と客の異動などあるとき、先方に伝達の 仲宿で軽い昼食(お手つき)をすまし、容姿を各々整える。

する。

場所は、奥座敷の床の間で荘厳に行う。着座すると、花嫁のの契を結び、社会的に知らせる儀である。三三九度の儀(三三九度の盃―むすびという)。新夫婦の千代

角かくしを一人の女が出てはずす。

事のとき、一升桝に豆いりを入れなげつける。そのとき新婦は 郎の「親子の盃」が行われ、 新夫婦となるために飲みあう。この盃事は古いころの「血換い」 体となった結合を示す。その酒を三ツ組盃の最上のものから、 具象化である。 三・九は、 ある。日本上古社会の「女権時代」を象徴しているのである。 く続けてきたが、いまは地方により、 の遺風といわれている。このとき、初飲は新婦が行うことを長 わるまで、謡曲をいくつか歌うのである。終わって、新婦と新 つぐ人も三回につぎ、飲むときも三口とする。 「イタイ」と大声を出す。これは「マメデー生イタイ」という 式には、 「銚子くわい」を行い、銚子の酒を互いに注入しあって、 島台・三宝・雌蝶・雄蝶の銚子に魚を用う。 何れも奇数で陽数のめでたい数と考えてきた。酒を 新婦は親子の関係を誓う。 新郎を先にするところも 三ツ組が飲み終 との盃 結び人

さて、三三九度というのは、共食信仰または共食習俗で、そ

中国の数字信仰が基本で、奇数は陽でめでたい数と信じてきた。 女の愛情の誓約なので、二人で同器同種をのみかわすのはその のなかで酒はもっとも魂のこもったものである。 女権時代の遺風なのである。これが三三度ではゴロが悪いので そして最後に女が飲み納めた。これは日本の女が主・男が従 それぞれ三回づつ飲みかわす。 節供などといっている。 特に奇数の単数を重ねることは、非常にめでたいとして、 ためなのである。とれを「三三九度の盃」と名づけていうのは、 ていた。結婚のとき「固め」「むすび」として酒をのむのは、 はその家で真剣につくったもので、 共食習俗の擬制血縁関係成立の公表なのである。 三三九度としたのは、 一日・三月三日・五月五日・七月七日・九月九日は、 この酒を飲み合うことは、 算数の九九を使用した。この盃ごとは このめでたい数字にあやかって、 もとは、最初は女がのみ次に男 いわばその家の魂がこめら 魂が共通化されると考え 昔は酒の醸造 重陽

⑧ 饗食 中宿へ使者が祝宴の支度が終わって開始することを告

伶酒の儀をめでたくすませ宴に入ると、仲人が謡曲二曲、御内をいるの代表者は見参の個人毎の紹介をする。その後に熨斗の儀、着席が終わると、相伴代表が相伴を個人毎に紹介すると、見

加人は、いろいろな歌や踊りで賑やかに祝福する。宝が「さんさしぐれ」二曲を祝う。これが終わるとはじめて参

ある。 膳の蕎麦を盃にのせて、めでたい「蕎麦のほめことば」を声高 拍手がおこり一層の賑やかさ、たのしさ、めでたさがクライマ 麦売り」が出る。鉢巻をしめ美しい半纏を着こみ、扇と一~二 という表現で、 衣する。 純白清浄の白色を用いたが、契をしたあとは普通の女となり更 三回行うこともある。 から模様の着物に着替える。 本杵で餅をつく。 ックスになる。このころに「中所餅」があり、新夫婦を入れ干 ようこそ知らねども」(あとにのせる)と節おもしろく陳べる。 らかに「しばらくしばらく、鳴り物をさてとめおいて、ほめる この賑やかさに一しお楽しいムードをつくるのに、「後段の蕎 この習俗は、 数ある毎に年数を長く住んだと考えた。俗信で そのあと花嫁は、「お色直し」をする。白無垢 着物を一回換えたときに何年も居つい 女は神を祭る人であったため、 もとは一回だったが、いまは二人 神を祭る

のが習わしであった。・
を遅くまでとの賑やかさは続き、送り見参は花嫁とその姉を夜遅くまでとの賑やかさは続き、送り見参は花嫁とその姉をまた山間部では、「仲間入り」のお茶事をするところもある。

を丸髷に結いかえて、花婿の父母に添われ実家へかえる。そしては一もどり(お膝なおしともいう)。 翌朝になると、花嫁は高島田

り、新しい親族と連帯感を強める。
とのとき新婦の父母はまた送って新郎の家へ来て再び小宴をして帰じめて、何々家の人として挨拶をかわす。生家で盛宴をして帰るが、

現在は新婚旅行に旅たつので、全員で歓送し祝福する。婦は持参するとともある。「一もどり」の夜は床入りの儀があったが、この「一もどり」のとき、以前は三ツ目の餅を土産として新郎新

花嫁の服装(和様)習俗

1

島田髪とあげ帽子

娘の初々しさをあらわすに、

島田髪とし

2

結婚する相手の夫以外に顔を見せないという習慣があるので、 仕える聖女のスタイルの象徴で、 ている。 結ぶのは金銀の水引二本を使うのであるが、この水引は先様に た。 深い綿帽子をかぶって婚家に行き、三三九度の盃をめでたくす が俗にいう綿帽子で、桂巻きというのは京都の桂の女が宮中に わすため白無垢の装束をしたもので、 もと綿帽子であったので、 よろこんであげるとの意味である。また島田につける帽子は、 たというのがはじまりである。また古くから日本の女性は もともと結婚式は神を祭り、 特に花嫁のときは、文金高島田として結う。このとき髪を 晴れて夫婦になってからこの帽子をとったのである。 この綿帽子から一枚の白布にかわったとき、 いまでも綿帽子という古語がのこっ 神に仕える女が純白清浄をあら 神を祭る結婚式にこれをかぶ 頭に桂巻をつけた。これ 島田

美しさを一層ひきたたせている。
美しさを一層ひきたたせている。
と、「角かくし」とはうまい庶民の表現です。これには、花みると、「角かくし」とはうまい庶民の表現です。これには、花をかくすとかという俗信も附会されて、それが正しいものと思をかくすとかという俗信も附会されて、それが正しいものと思をかくすとかという俗信も附会されて、それが正しいものと思をかくすとかという俗信も附会されて、それが正しいものと思いる。

- 一様の結び方は、熨斗結び・螺結び・貝の口結び(おたいこ) 帯の結び方は、熨斗結びは人様に心よくあげる「アワビノシ」のなどがある。熨斗結びは人様に心よくあげる「アワビノシ」の表現、蝶結びは蝶よ花よと育てた慈愛の表現、貝の口結びは、また蛇ノ目傘をさす。途中花嫁に邪悪なものがつかぬよう、蛇ノ目傘で護ることなのである。晴天でも開いて用いるのは、そのためなのである。
- 家に帰れないとの考えからであった。 草履である。履物を贈るのは、花嫁が生家のものがないので、は桐の名産地なので、高貴な下駄をおさめたという。その後は の 下駄など履物は、必ず先方からの結納の履物をはく。わが町
- けていた。暦の上段・中段・下段の三つが、めでたいことばに大安・なる・などの日のことである。仏滅「さる」の日にはさま日を選ぶ。吉日とは、九星暦の上のめでたいと考えた日で

うずまっているときは最高であるが、それは容易にないので、

二つぐらいまでよい日を考えていた。

(5) エル・モドル・コワレタ・シ(死)・キル・キレル・ワカレル この日の忌みことばがいくつかある。例えばサル・トラ・カ

コワレタことをフエタなどと、子孫繁昌を暗示したこと

におきかえた。

6 結納金は金のみの場合は、月給の三倍の額としているが、そ

0) 家毎に異なる。

7 ィングドレス)などを用いる人も多くなってきた。 近頃は、公民館結婚なども行われたり、花嫁の洋装(ウェデ

また新民法の趣旨によって、進上目録の贈り名と受取名を結

婚当事者とする人もある。

また婚礼のときは、包紙二枚・水引も二本を一組として用い

る。二は新夫婦の二体の姿である。

進上目録は、

美濃紙に左のように書く。

進 Ł Ħ 録 (七品のとき)

熨斗

家内喜樽 壱荷 (柳樽という)

寿留女 壱連

反物 末広 荷反 壱対

> 花紙 壱帖

右幾久敷御受納被下度候也

御手富貴

壱筋

年 月 H

新郎氏名

新婦氏名(先方の姓を書く)

、もとは双方の父の名であったが、 個人尊厳の思想はここにも

表われている)

【五段のそばほめ言葉】

せう。 までにと、納まるまでのかんなん苦労の所、さっと浅黄にほめま らねども、 しばらくしばらくと、鳴り物をさて留おいてほめるようこそ知 とゝにそゝう奴がまかり出で、 そばの誕生より腹の中

され、 って、 くるりくるりと練り廻され、板州姫松の住人に柔剣道を打習わし 絹羽二重の目をしのび、鉢が村にと集まりて、湯を入れ水を入れ 村へと住居して、日杵の残言により、石臼の中をば廻り来たりて 六七、八九月、土用になりすれば、大織冠鎌足公に刈取られ、 は。 そうもそもそば太郎三角と申しまするは、 仙台で正宗四国で重忠、 葵の下坂ひらりと抜いて、キャチキャチキャチと切りはな お湯の中にと飛込んで、火花を散らして戦いしが、すでに 会津で藤四郎長光、名馬の駒に打乗 山畑城内に誕生致し

守、 門をくゞり抜け、 番には納豆小太郎糸重公にと巻取られ、急がば早いもの、 は鼻を通すつぶ唐子の助与エ門、 召して、 中 Ų の将軍、 あやらしと見えければ、竹篭にすくい取られ、水の中にと休息な 二番には大根しぼりの助高堂、三番には山渉三河の助ピリピリ 六番にはからから荒木又芋、七番には四国密甘の助、 第一番にひかへしは、 御箸の礼儀にて膳に打向へば、あとにひかへし一族郎党一家 腹の中にと納まる身こそ目出たけれ、ほゝうやまって申す。 切立のかぶとをかぶりしは、これぞ一騎当選の若武者な 四番には幕の内ネブカの助、 奥歯の茶屋にと腰をかけ、のどの細道しよなよな 梅干小太郎種有、紫蘇の葉のよろいを 九番にはくるみ五郎油の助、 五番にはゴマ四方奴田島の 前歯の 八番に +

五 葬制(葬式)

(提供·新井田正男)

天寿を完うして、または夭折、急死したとき、その人の霊に敬慕と弔意をあらわすため、古くからこの儀式は丁重に行われてきた。しかし、広い地域の複雑性は、その因習も多様である。死は特別の尊重として、神となり、成仏した霊格として、荘厳に行うことはよいことであり、絶やすことはできない行事である。

4

呼称 「ジャンボ」とか「フコウ」とか「葬式」または「仕舞

詞である。とかいう。「ジャンボ」は葬式の摺金と「鉢」の音響から呼んだ代名とかいう。「ジャンボ」は葬式の摺金と「鉢」の音響から呼んだ代名

施主の家

① 家では、末期の水を含ませる。共食習俗で、このときから永の 家では、末期の水を含ませる。共食習俗で、このときから永

- えたのである。 近所知人は、先ず「枕団子」を作る。死出の旅路の弁当と考
- 番のところや、組内などでその日の受持を決める。

五人組は、一家総代を中心に、葬式の準備をする。穴方は輪

⑥ 公式の知らせがなくとも、きいた人はすぐ顔見舞にいく。⑤ とうしている中、菩提寺の僧が来て「枕経」をする。

全

戸が行う (西山)。

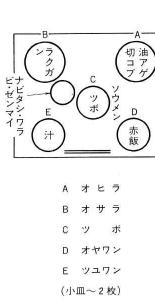
7 をかぶり、藁帯をしめ裸足で行う。死人は、白御衣・白脚絆 白手甲で草鞋・白冠にウツギ杖・頭陀袋(五穀六文)をかける。 子供・兄弟で入棺をする。このとき、襟を左まえにし、手拭

8 御詠歌(うたよみ)をあげて、冥福を祈る。近所の女で、

国三十三番をよむ。

葬式当日

- 1 見舞請け、 近所組内の手伝人は、早朝から施主の家に行き、 葬送の準備に多忙を極める。 食事支度、
- 2 をうける。 子供兄弟は、 見舞請けに、 喪服を着て着座し、 訪問客の挨拶
- 4 3 季節などでいくらかの差はあるが、左のようである。 穴の上部縁を青杉葉で飾る(陸尺・六人)。 他所見舞と特殊関係の人には、昼食を賄う。そのときの膳は 穴方は、施主の案内指示によって、 墓穴をほる。深さ六尺、



(5) 僧は法名を与え読経を捧げる。

葬列とその夜

1

- 棺をしめるのは「イケダイ」「子供」「友人」などである。手伝 過ぎると信じられてきた。女は藁草履に無地の白布をかぶる。 と、死人は閻魔庁を通る礼装をしてきたというので、無事通り す天冠で、死人の冠の白いのもそのためである。これをかぶる で別れをする。男は額紙をつけ藁草履をはく。これは清浄を示 出棺を知らせる鉦がなると「イッチャッテクナンショ」の声
- 2 人は 係が葬列の順読をすると、持物を捧げて行列をつくる。 「別れ酒」を椀で飲ませる。
- 3 の出口に、 穴方の一人は、辻ローソクをたてて、道順を示す。 **葭で仮門を作ったところから出す。** 棺は座敷
- 4 葬列は左のようである (安久津)。

膳・位牌・棺、 禅の綱(婦人)、ドッペ(胴持)一般会葬者衆

区長(提灯)、僧侶、生花等、六合・死花・玄水・玄茶・霊

- (5) して、穴に納める。縁者は、土を三回かけ、 墓で棺は三回左廻りをする。僧は引導を渡し、 額紙を納める。 そのあと焼香
- 6 (日を逆さにした上)を体にふりまいて、穢を浄める。 会葬者は、 墓の近くに草履を捨てて裸足で帰り、 家の前で塩

丁寧に埋めて、鎮石を置き、供物を捧げて帰る。

方は、

7 僧は 棺の出た後は、 「後祈念」をする。このとき、穴方と僧は同等の膳で待 藁を二十本ほどまるめた箒ではききよめる。

(8)

(10)

民 俗

遇する(安久津は帰宅してなし)。

⑨ 見舞には、米見舞・赤飯見舞・金銭見舞、そして、御供など

の別がある。

高を施主に渡す。 葬式が出ると、帳場では見舞金の合計を帳簿と照合して、

総

① 見舞返しは、家々で異なり「白布」・「茶」・「砂糖」など

である。

礼状は、はがき印刷で全員に送達する。

⑩ この夜、御詠歌をあげる。

ある。 送の翌日に、娘たちが「シンカワ洗い」をしてから行うようでい 「片身わけ」や「遺産相続の話」などもあるが、これは、葬

⑩ あす全員縁者の墓参りをする。

⑥ 三日供養(とき)、七日供養(とき)などをこの日にすますと

其の後

① 三十五日忌、四十九日忌、百ケ日忌なども、古い因習によっ

② 年忌法要も、定まった通り行う。

③ 三~七年忌ころ、石碑をたてた。朱字法名は、彫刻の関係で

夫婦の一方の生存中をあらわし、血の通っていることの意味で

ある。

④ 近頃は、「何々家之墓」として葬ることがみえてきた。将来は

⑤ 幼少年児などは、「サカサマ」と称して、葬式を小さくして葬

三度終わったことにする。「何事三度アル」の諺を忌んでである。年内に二人の葬式を出すときは、二回目のとき人形を入れて

神葬は、わが町では少ないので省いた。

7

第四節 食習俗

あったと思うが、記録としてわが町の文献にはみえていない。社会 って来ていると考えられる。 るに幕藩時代の年貢米上納の苦悩は、 然とたたかいながらの生産史である。護岸工事の苦労と乱費、 特に只見川、 るにすぎず、 を除いて冷温地が多い。やや広いところの水田といっても数指を折 とに挟まれた山麓や河岸段丘の狭い耕地が多く、その潅漑水も一部 型の低温多雨雪地であり、 わが町の食糧生産の努力は容易でなかったと思う。 滝谷川、 開田開畑は祖先以来の努力の累積というほかはない。 長倉川、銀山川等の氾濫史をみても、 地勢上からは、山峡の地が多く、 飢饉のときの悲惨な生活はどこにでも 自然と食習と緊密な関係をも 気候が北日本 常に自 山と川 加う

福祉政策、流通機構の未発達は、こうしたときに一傍の影響を及ぼ

明治までの食習

したものと思う。

った。 ば十日に一回位の村休には、赤飯を食べるとか、山の激しい労働を ので、栄養のバランスなどは考慮にいれていなかった。然しいま考 →三回は、 けの飯を食べることはできなかった。 いたことになった。それで主食の飯は、よほどの時でないと、 に持ち帰らせることなどが、いくらかでも栄養のバランスをとって また招待すると、そのお膳につけたものを、ツットッコに入れて客 餅を食べたり、小さな私日市があって、 する人は、 えてみると、無意識の料理の中にもそれらは加味されていた。 カトリといって、糧のまざらないところを弁当に持たせることもあ ふだん食 贅沢というより、 時々小豆飯を食べるとか(忍耐心を強めるという) オシロメシを食べることを許されて、普通は糧飯で、ナ 健康と体力の持続などが主としたも 村の万書上帳をみると、 魚類(乾物)を食べるとか、 或は 米だ 例え

糧を上にあげて焚いたり、混入して焚きあげたりいろいろ工夫し、 毎夜あすの糧つくりに努力し、その焚き方にも技量が必要であった。 ・大根・栗・小豆などであった。この糧は主婦の夜なべの重労働で ・大根・栗・小豆などであったが、寛永二十年に保科正之が藩主に入部 種とは米以外の混入物のことで、季節によっても異なるが、菜乾

いても心よいほど上手であった。竃と水の神に主婦が供えるナカトリのとり方のヘラさばきは、みて竃

ンというのも味もみた目に美しかったので、みんなが食べていた。 腐のカラに野菜を入れて、 は汗を多く出すので、 噌などで、 れてきた。 ・筍 汁・ワラビ汁・豆腐汁・油揚汁・ケンチン汁・茸汁など賞味さ 汁の実も季節的に多種多様で、 副食物は季節的に異なるが、 時々はイワシやニシンなどを加えた。労働が激しい農民 油と塩分を常に用いている。 油でいためたものはよく用いた。 味噌汁・漬物・納豆・油 特に山菜の多いわが町では、 寒くなると、 味噌・ センバ イラ汁 豆

できた。
できた。
をは狩人が兎・狐・山鳥・雉など、動物蛋白質の補給をすることがべることがあった。タックリ(田作)は味出しによく用いていた。べることがあった。タックリ(田作)は味出しによく用いていた。 かいる とがあった。 タックリ (田作) は味出しによく用いていた。 愛の季節に鱒されて は、川魚を釣りの上手な人からわけて貰ったり、愛の季節に鱒

高価なもの、桶・みそ蔵(小舎)などの設備が必要なので、こんな味噌煮込をした。このとき煮た豆を近所に配って祝って貰うと、色味噌煮込をした。このとき煮た豆を近所に配って祝って貰うと、色味噌煮込をした。このとき煮た豆を近所に配って祝って貰うと、色味噌煮込をした。このとき煮た豆を近所に配って祝って貰うと、色味噌は、ほとんど自給自足で、近くの麹屋で製麹して、春か秋に味噌は、ほとんど自給自足で、近くの麹屋で製麹して、春か秋に

る風景は、

農村の風物詩などである。

春・秋・みそ釜から出る煙と泡のたつ水蒸気の家の庭から揚ってい総合資材を持ち耐えることが容易でなかったことになるわけである。

苦は容易でなかった。モロミを布袋に入れて、煮出す主婦の労家醸造醤油がはじまった。モロミを布袋に入れて、煮出す主婦の労用いていた。それだけ味噌の味がおちるので、大正の初期から、自用がはタマリ(溜り)ともいう。味噌桶の中央にザルを沈めて、醤油はタマリ(溜り)ともいう。味噌桶の中央にザルを沈めて、

いた。ネギや大根オロシなども盛んに用いられた。調製したり、山椒の葉や実、ショウガなどの自然植物の葉茎実を用香辛料としては、カラシ(唐ガラシ)を栽培してツブガラシなど

花に似ているための別名であろう。

花に似ているための別名であろう。

花に似ているための別名であろう。

花に似ているための別名であろう。

またそれは季節によっては保存食になることもある。凍餅・餅煎餅にして餅をつくのは、米を節約することと、小米の利用のためで、の他の混入したときは、カケ(ヤキ)モチなどといった。小米を粉農家は時々餅をついた。イイ飯というのは餅米だけのもので、そ

・餅イリ・メーダマ・笹餅などがそれである。

べる味は格別なものであるという。師走二十八日の供え餅も鏡餅・餅・納豆餅・ゴマ餅・クルミ餅などで、つき臼の傍でキナコ餅を食ある。つきがけの餅を食べるときには、味つけに、お汁餅・アンコ色なので、正月二日に搗いて黄金餅と称して神棚に供えたところも餅の糧には、粉・粟・モロコシ・トチなどを混入した。粟餅は黄

食者もいたことであろう。

食者もいたことであろう。

食者もいたことであろう。

食者もいたことであろう。

食者もいたととであろう。

飾餅は特に念を入れてつくった。

り方など、各地区に優秀な技を持っている人が多い。る技術・煎る技、それをユデる技量、そしてそれを浸すタレ味の作ある。わが町のソバはまた風土からくる特別な珍味がある。粉をねまたヤセウマとか、ソバネリ(ネリッコ)とか、オカラクなども

平常と異なる食物 婚礼・葬式・お日市、そのほか来客のあるとき、或は大仕事の終わったとき(馬具洗い・取入じまい)などは、シ・サンマなどを用い、喜びごとのときは、コンブ・マスなどの縁起物を用いた。卵も生産はしたが、売ることが主で、卵揚げなどはとなった行事以外は食べられなかった。油揚・豆腐は多くふだんより用いて、味も少しはよかった。

うと、遊びに行っても、夕方はやく帰って来たという。は食べることは容易でなかった。子供たちが今晩はオハギなどとい高価な砂糖を使ったのだろう。ボタ餅(オハギ)なども、ふだん

特殊な言葉

- ① 「コビル(コビリ)」というのがある。作業中の午前十時とろ
- クもその内容は種々雑多である。 止と補食をすることで、その飲食することで、コビリもイップの 「イップク」というのは、多くは午後三時~四時ころに、休
- ③ 「オタチ」という。飲食物を無理に強いることである。客にの「オタチ」という。飲食物を無理に強って、オタチ」する位でないと健康体でなく、労働力がないと考えた。花嫁にオタカモリいと健康体でなく、労働力がないと考えた。花嫁にオタカモリをするのもそのためである。
- の接待のとき、この言葉はよく取交わされた。ギしていないで上がらんしょ」というように使われている。客④ 「ジンギ」辞退すること、特に飲食物のときに用いる。「ジン
- 終わりを全うし、人生を立派に全うする象徴なのである。このできは一尾完全なもので縁起がよい。即ち完全ということは、なかでも形の完全なものに対しては大喜びする。切ったもの、ほ頭「お頭つき」われわれは、形や色で縁起を喜ぶ国民性である。

てつけるのである。

のもので、カザシといった。茶碗の歯あたりの音がよく、洗っても 清潔度が木椀より高いので、 あった。このころまで、飯は茶碗でも、 箸も一回毎に洗わず各人が箸箱に入れて、 は丸盆を表面は朱漆。あとは台の内外まで黒漆塗りのものである。 ることもあった。 は箱お膳を持ち、 お膳を用いた。 お膳・お椀の変化 日光お膳ともいう四角で脚付、 引出しに箸や残って次に食べられるものを保管す 藩制時代から明治末期ころまでは、各人毎に 皿まで瀬戸に静かに変ってきた。老人 汁はお椀で皿も多くは木製 時々主婦が洗うくらいで 縁付であったり、或

へ移ってきた。
へ移ってきた。
なって流行した。とれも近時姿を消しはじめ、食卓腰掛式られるということで、個人から共同への進歩、食事支度の時間的能一枚(三尺→四尺四方位、三尺に五尺)で、家族全員が一時に食べ

二 戦前・戦中の食事

漸次生産減退し、そのとき疎開児童、疎開人の増加によって、地方べての生産減少を来した。特に流通も軍需物資輸送が首位なので、不足、肥料(化学肥料)の絶対不足によって、稲作のみならず、す戦争が激しくなると、供出米の過多、青壮年の出征による労働力の戦争が激しくなると、供出米の過多、青壮年の出征による労働力の

噌・漬物に事欠くことになってしまった。

ため、五○センチメートル四方の布一枚、縫糸一繰、煙草一本、味生活態度を持続した。米やすべてのものは、統制経済にしばられた食糧はピンチにたった。国民的決意の「勝つまでは耐える」という

唐黍などの耕作に専念した。には、学童によって耕作して大豆を植え、川敷を拓いては、蕎麦・には、学童によって耕作して大豆を植え、川敷を拓いては、蕎麦・学校の校庭には、小麦・馬鈴薯・甘藷・大小豆を、通学路の両側

人足など過重な割当てをすることもできなかった。

、食うことだけに専念した。例えば、朝はお粥と塩つけの菜大が、食うことだけに専念した。例えば、朝はお粥と塩つけの菜大が、食うことだけに専念した。例えば、朝はお粥と塩つけの菜大味開の人たちは、自己の衣服と食糧交換に夜を日に継ぐというよ味

葉の乾燥をして、それを刻んで飲んだ。煙草は十日に七本位の配給なので、煙草栽培の残業、イタドリの慰めたこともあるが、農家自体が十分に食べたわけでもなかった。疎開学童に昭和二十年の正月、婦人会員で餅と豆煮りなど贈って

どは、高い値で売買された。
この中には、ふだん目につけぬものが多かった。土用百合の根茎な(大根葉を天日乾燥させたもの)・木ノ芽(イラ・タラ)などで、ショウ・シオデ・セリ・カワナツナ・イモガラ・ナボシ・フクサナタンポポ・オオバコ・三ツ葉・イタドリ・アカザ・ウコギ・サン

つ、報国の誠をつくした。とうして、人間食から動物食への転換期があったように思われつ

三 戦後の食事

によって、少しずつ食品の増加が見えてきた。戦後しばらくは食糧の不足は続いたが、漸次食糧生産の拡大復興

昭和三十二→三年とろになると、食品の宣伝に熱を入れていま数量も激増して、子供の好むものは何一つ不足なくなってきて、も数量も激増して、子供の好むものは何一つ不足なくなってきて、るようになった。

すざいバライティーに飾られている。 与えるようになっている。いま柳津のスーパーなどをみても、もの与えるようになっている。いま柳津のスーパーなどは、自由選択の機を主婦は家庭で料理の必要のないような状態に変わった。即時に赤飯日常食品も豊富で、しかも味付料理をビニール袋に詰めて売り、

ているかが知られるのである。こうした反面、従来の和食から、洋とうしてみると、如何に豊かさがあるか、生産システムが進歩し

食風への過度期でもある。

四 食品雑記

塩 わが町は只見川という母なる川があって、生活と文化を運ん でくれた。新潟地方と会津地方の物資の交流がこの川を利用したことは、疑いがなく、しかも会津への咽喉がわが町の藤地区であった ことは、重要な点である。会津坂下地方が、藤村を牛沢組に編入し ていたのは、政治上だけや地勢だけでなく、文化と物資流通の出入 でくれた。新潟地方と会津地方の物資の交流がこの川を利用したこ でくれた。新潟地方と会津地方の場質の交流がこの川を利用したこ でくれた。新潟地方と会津地方の場質の交流がこの川を利用したこ

をはるかに大きく越えたものである。かわりがある。新潟と会津の塩の道の拠点藤村は、他の物資の比重あったかは山村として、その多寡が生活に影響したことは大きいか特に古代から近世まで、塩が生活上如何に重要で、如何に必要で

に送られている。
て、一方只見川の船で、片門・藤で荷下しし坂下・若松・柳津以南して伊南川流域に送られた。また越後からは、鳥居峠・藤峠を越し山王峠を越して田島・荒海へ、一は、そこから中山峠・駒止峠を越山至峠を越して田島・荒海へ、一は、そこから中山峠・駒止峠を越

井沢銀山に送達した記録もある。一俵(二斗入)は塩俵という小俵送った記憶がある。斎藤家のものには、一日一、七○○俵の塩を軽があって、ここで荷造りをなおして、坂下・若松方面と柳津以南に西会津町野沢には十一の塩屋があり、藤村の宿駅には、塩取扱所

背負った背負子人や馬の道跡であり、 あったろう。藤村と椿村の間の塩峯峠こそ、交通不便のころの塩を 存品の漬物に使っていた。 優秀なので、 と阿波の斎田塩と赤穂塩であったと記録している。赤穂塩は品質が この塩は新潟産だけではない。 いとき、会津領民は田島方面を除いて非常に困窮したこともある。 と新発田の塩との交換を永く続いた。一時、 越後国新発田藩と会津藩主は特別契約をしていた。会津のローソク うした汗や脂が渗んでいるのである。 であった。また会津全体の塩の必要は莫大な量で、その確保には、 味噌用や冬の漬物用に使い、その他は日常の食用、 柳津の塩屋さんも七折以西南の中心地 新潟港に積荷してきたのは、 あの峠の土の中には祖先のそ 争が起きて塩の入らな 能登塩

るとき、太い竹筒に塩を持っていった。
を口にしていると、五日間は死なないといわれ、修行僧が山奥に入を示した。塩の欠如したこともその一つである。水を飲み少量の塩を示した。塩の欠如したこともその一つである。水を飲み少量の塩を示した。塩の欠如したこともその一つである。水を飲み少量の塩とき、太い竹筒に塩を持っていった。

この大切な塩もそのままの姿で、永く保存することができない欠点る。なぜこんなに多く祭ったのだろう。考えて見てほしい。しかし塩の神-塩竃神社は県下に十七社ある。徳島県と仝数で日本一であ古い祖先はあすこに井戸を掘り、塩水を汲んだことも考えられる。塩野地区には未だ岩塩の溶水で稲の育ちの悪いところもあるが、

がある。どうした智恵を考えだしたのであろう。

○○年以上の味噌の生活をしてきている。(九○一)にはじめて「味噌」の現在の文字がみえる。過去一、○(九○一)にはじめて「味噌」の現在の文字がみえる。過去一、○(九○一)にはじめて「味噌」の現在の文字がみえる。過去一、○器を強い塩漬にして保存し、漬汁や漬けた麦・豆から塩を採った。醤味噌、味噌、味噌こそは塩の備蓄の大発見である。はじめ大麦・大豆

って、 わける。 同作業でもあった。大正のころまで、 穫後の味噌煮釜の淡い煙と水蒸気の立昇るのは、 順を定めて味噌醸造を行ってきた。春の暖かい日の味噌煮、 てきた。各集落毎に大型の「味噌釜」を共有して、仲よくその使用 である。豆が煮えると、 炭焼きなどで汗を流す重労働のため、 東北は寒冷地、 誰も煮ることができなかった。 手間のある人は手伝いにもゆくという、 わが町は積雪寒冷地なので、それに夏は汗を冬も 一皿宛近所に配った。食べて貰って喜びを 味噌煮のできる家は富者であ 多くの塩分を食習として守っ 連帯感と結いの共 田舎の村の風物詩 秋の収

ず待たなければならない。格であった。このため容易な経費でなかった。それも三ℓ四年食べ格であった。このため容易な経費でなかった。それも三ℓ四年食べ明治十年の会津は、玄米一俵(四斗入)と塩二俵(二斗入)が同

す塩味でなんだかすっきりしない。これから水クサイとは、人と人の弱い味噌汁を宿で食べさせられ「水クサイ」といったという。う塩気の低い白味噌を好む。東北人が伊勢参りから京都に入って、塩東北人は風土の関係で塩辛い味噌(赤味噌)を好み、関西の人は

白味噌のウス味からきているのである。との間がよそよそしいことに転化しているが、舌に甘さを感じな

味噌の材料は、

。大豆(イバラキ豆がゴオが多くてよい)。

麹(砕米などを麹菌で醸造したり、麹屋で「ネセテ」もらう。

塩(なるべくよいもの)(海水塩か化学塩

水(豆を煮た水を使う)

いという。

はここにある。きない自家製味噌を永く続けるべきであろう。おふくろの味の原点は大きい。特に成育盛りの子供、高血圧の人の健康に欠くことので、物が、一丁。風呂八町。味噌汁三里のたとえのように、味噌の効果

い。味噌はこうした資本と歳月と辛若の総合された、その家独特のが豊富になると、このこともなくなって、今の若者には知る由もな汲んできて味付けに使った。これが「タマリ(溜)」で、やがて醤油また、この味噌桶の中央に小ザルを沈め、その中にたまった汁を

ことや、

られる殿様の土地のみである。 味なのである。 強い領藩主の城下町で醸造されているが、それは、 先人の考えは、 敬服の至りである。日本著名の味噌産地は、 だから「水をもらっても味噌はもらうな」と教えた 塩を自由に集め 権力の

ていた家が相当多かった (大正十年ころまで)。 マリ」のとれない家は、大根の切漬 油 はじめに書いたように、最初は「タマリ」であった。 (茎菜漬) から出た塩水を用い 「タ

いてきている。

なものと塩をまぜることで、しかもそれが醸成して煮詰めるという が化学製品もあろうが、低価格で味もよく喜ばれている。 を実行した。 大仕事が加わるので永続はしなかった。戦時中は七−八○%はこれ その後は「醤油自家醸造」を行った家もあるが、豆麹という特殊 現在ではもう行われていないし、寧ろ大醸造屋のもの

とは、 んの味が別なところの味」という意味で、 タブーとされていた。 諺があって、「おくさん味がいいですよ」と賞めることは奥会津では の自慢になるようにしたいと考えていた。「漬物は妻の味だ」という 物 漬物は主婦の腕の最もよく発揮される食品で、夫や家族 わが町にも一部そうした地区がある。「おくさ 味を知っているというこ

どの神経を用いていた。例えば重し石や漬物器をつけ物毎に別する ないほど重要なのである。 容易なことでないという意味のことである。 漬物は植物性食糧品として、三度の食に欠かすことのでき 風味をよくするためにその漬込み季節、 そのため主婦は、 との漬物には異状なほ 塩加減などその要

素は非常に多い。

果してすぐ漬け色をシソによって明るく出すとか、 果をおくらせ、のち土用干をするとか、その家のしきたりが永く続 例えば梅漬は、パリパリ漬として年間を通すには、 やわい梅漬は摘 六月二十日摘

決して使わないというのも、 る味をつくって美味である。 また微量のニガリ分を含んだ塩は、 は三%位を混入しているという。 漬・当座漬)は、 ただ塩の入加減であるが、 わが町の漬物の季節と漬物名をあげると、 重さの三%の塩、 比較的はやく食べるもの わが町の某家では、 とのコクを出すためだという。 わが町の辺は少し塩辛い方が多く、 漬物に塩辛さを強め、 そしてのちに食べる漬物(長漬) 漬物には化学塩を (チョッコラ コクのあ

春

春蕪漬、玉菜(キャベツ)漬、 春菜漬、 ウド漬、 ワラビ漬、

(夏

タケノコ漬

梅漬 漬 根の幼茎と根)、 土用百合漬、 (初夏)、 ナス漬、 シソ漬 ラッキョウ漬、 キュウリ漬、 菜漬、 白菜漬、 瓜漬、 モミ漬 薬用人参焼耐 (夏大

(冬)

(秋

大根切漬、 大根長漬、 沢庵漬、 菜漬、 キノコ類漬

秋清のものを奈良漬に漬替える。

夫と奥床しい心の温かさ感じるものである。い漬物に出会うことが多いのはうれしいことである。おくさんの工など、地域も広いのでバラエティーに富んでいて、訪問の際に珍しなど、地域も広いのでバラエティーに富んでいて、訪問の際に珍しなど、地域も広いのの温かさ感じるものである。

れて、 子漬を添加すると、その美味は天下一品である。 が、 らしい生活の知恵である。特殊な香気をもつので好まない人もある 夏よりはむしろ寒い時の美味が、そう考えても無理ではない。 の風土からみて、東北人であろうと仮説をたてている学者がいる。 自給自足のころは、 ようになった。 納 スーパーから水戸納豆、 塩を適量に入れての味、 温かく保管して納豆をつくった。 豆 大豆のうち比較的小粒の品質を通称は、 わが町も多作して「藁ツト」にこの煮込豆を入 高田納豆等が安価で手軽に求められる 日本葱の千切混入、または大根葉の細 この納豆菌の発見者は生活 今は作る人も少な 納豆豆という。 すば

ることを望んだのは今の人とかわりはない。
昔の人々の真剣な態度として、納豆の糸の多いことがよい納豆であ言で寝せて、旧蝋二十八人日餅に間にあわせたと云い伝えている。言で寝せて、旧蝋二十八人日餅に間にあわせたと云い伝えている。の場立を増えたがら「藁シト」に入れて包んだという。

第五節 服制習俗

できないが、概説をしてみることとする。を化によって変化してきている。これらをくわしく記述することはどとわかれて、多種多様である。その着衣・履物・持物等も時世のらとわかれて、多種多様である。その着衣・履物・持物等も時世のいたり、カーリーが、カーリーが、カーリーが、大人・子供・老人ないだいが、概説をしてみることとする。

作業表

寒中になると、綿入繻絆をつけて保温をした。 四尺位のものを、首を通す分だけ切抜き、腰にあたるところに紐を 処を小紐で結ぶようになっていた。股引は股割れであったので、 上に木綿縞の繻絆をつけ、 つけて、 るやかにしておいたのは、 しばりつけていた。女も男より少し長目の股引をはき、 江戸時代から明治初期までをみると、男は紺か浅黄の股引をはき、 一周して前に結んでいた。 陰部を隠すためである。 前垂(首とおし)をかけてその紐で腰で 涼しくなると、 給を着、 前垂は紺の長さ 繻絆は胸の さらに

ていた。雨が降ると、男も女もアマミノに菅笠をかぶり、女は雨の肩前に垂らすようにし、女はネジリハチマキはしないが首かけはしをするとき、ネジリハチマキをし、休むときは、首にかけ両端を両冠物は男女とも一巾手拭で、用い方は頬冠りが多く、男は力仕事

女では顔面露出率に非常な差があった。 あたることをきらった。 しい心のあらわれである。女は天性、美 形のくずれないように工夫したのは女ら 夜になると、アミガサを格子にはさんで、 にしたのは、 いうのを巻いて目だけ出しているのが現 山形県天童市外にゆくと、 しさを好み美しさを保つために、 しソリをつけて両側から頬に近づくよう ふらないときは、アミガサを冠った。 みるからに優美であった。 頬冠りでも男と ハンコタナと 天日に

ア 3 ガ

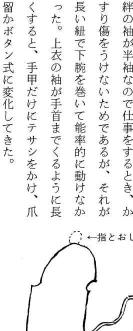
絆の袖が半袖なので仕事をするとき、 くすると、手甲だけにテサシをかけ、 すり傷をうけないためであるが、 った。上衣の袖が手首までくるように長 長い紐で下腕を巻いて能率的に動けなか 手には、 テサシを女も男もつけた。 それが 襦 /^) ←指とおし

在も行われている。

紐

ともフロシキを冠って作業する農夫もみえた。

シ



テ サ

はいた。それも冬や春先のときには、ワラジガケといって、穿きつ てろにはワラジをはき、 履物は近いところの田畑へは、 寒いときや籔の中の仕事には、 アシダカ (アシナカ) で、 オソフキを 遠いと

> バキをつけているのもみられた。 かれた足袋をつくろって穿くこともあっ 田耕や山にゆくとき、ワラミゴの

ようになった。チリ仕事、ゴミ仕事、 の縫い合わせ分に、裏をもう一枚つける 手拭巾ほど両方に縫って、それ以外は離 きた。二本の手拭をあわせて、中央から たので、男も作業によっては二巾手拭を しておき、さらに大正末期になると、 いときなどこの二巾の利用価値は高かっ 大正の初期から、二巾手拭が流行して そ 寒

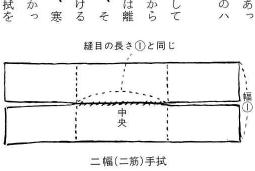
用いた。ゴミ仕事のとき二巾手拭(二筋手拭) のないときは、 男女

れるのは当然である。 は寒さも強く感じるので、フングミ、 パカマ)が工夫されてきた。水田に入るには、 なったという。 田作業に便利なために細め狭く工夫したもので、狭袴という名称に 幕末から明治初期になると、サッパカマ(サラッパカマーサル 高緯度の山間部でこの穿きものが、すすんで利用さ ユッコギなどの太いものを水 股引の膝下短いので ツ

普段着

る。

ヘイゼイギ、フダンギのことで、仕事から家に移ったときに用



はみることができなくて、 江戸末期から明治初期のころまでは、男も女もアサカタビラを用 昭和十年頃に高森の老人はこの着物を着ていた。しかし今で 麻では麻上下だけが遺っているようにな

あるとき羽織をつけた。 男は膚着に浴衣や袷を着て、帯は兵児帯、 角帯をつけ、 特別用の

ってしまった。

さらに喪服だけになってきた。

紐を許されている。明治になると平等観になって紐も自由になった。 羽織を用いないときは、 江戸時代は羽織紐は、ここは紙よりを使わせられ、役付の人は糸 男は半纒、綿入半纒を用いた。

対し、女は元禄袖にしたり、 柄はやはり女らしい優雅な模様ものを用いた。袖なども男の筒袖に 以外は手拭位で特に記すものもないようである。 短物は、 女の人も腰巻に膚着、そして浴衣、給は男と変わりないが、 男は島打帽や中折帽を用い、 八ツ口をあけたりなどしている。 女は冬のオコソ (御高祖 その

敷かせるのは、よほどの富者であった。 用いた。座布団は、 を用いていて、大雪のときは、フミダワラ(踏俵)カンジキなども 用いた。冬は降雪になると、ゲンベ(源兵)フカグツ(深履)など 穿き物は、草履・下駄・足駄で、雪駄などは少しおしゃれの人が を用いている。 ふだんは用いなかった。 このかわりに、ウスベリ (薄 特別な客の来宅者には

とも洋服を用い、特に女では、 現在では、 六十五歳以上の人は和服姿を好むが、 ワンピースやツーピースにスカート、 それ以外の男女

女性は、

腰巻の着け方を知らなくて母に指導を受けている人も珍しくなくな ら、パンティ、 ズボンに変わったためである。 ズボンを用いている。若い人は腰巻も知らない位でほとんど幼児か または、 ズロースの生活になってきた。上衣が洋服 二十三歳の娘が花嫁の衣裳のとき、

つかしくなった。 や麦藁帽などは、 などになり、若い男子たちは帽子などを用いる 人は少なくなってしまった。 冠物も老人以外は、 夏の風物詩であったことがな スカーフ・ネッカチーフ 昔の夏の一文字帽

糸系統に変革されたし、 明治大正と異なって、 メリンスやチリメンの 普通着は木綿系から毛

用途は少なくなり、

ウール布を用いるというよ

二十三年頃からで、紋平の代わりに用いてきた。紋平の裁ち方、 流行とはいえ異様な感がないでもない。 用袴のジーパンが、 津紋平、山形紋平も姿を消し、既製品のズボン化時代になってきた。 い方も若い人たちは忘れさるようで、一時東京都民に歓迎された会 うである。また、女子がズボンを使用するようになったのは、 特に夏季の服装の色彩、 男子青年の長髪の流行は一層それを混乱させている。 集会の際も舞台でも青年男女が用いているのは、 デザインも男女の区別が容易につけにく 特に作業 昭和 縫





料が五、〇〇〇円もするというのも驚くのである。り手数のかからないものが喜ばれるようになった。然し一回の整髪髪を梳ずることは女子の日課であったが、「永久の波」としてのあま

た。 ーバック、金やダイヤや宝石の指輪のつけていない人が少なくなっーバック、金やダイヤや宝石の指輪のつけていない人が少なくなっ服装も変化し、婦人のオベラバックは、ハンドバック・ショルダ

に、女子はハイヒールも多い。靴が多く、ビニール靴、ゴム靴、そして色彩、デザインも多様な上が珍しくなかった時代から考えると、隔世の感がある。靴も上質皮が珍しくなかった時代から考えると、隔世の感がある。靴も上質皮

軽い会津の桐下駄も都会人の好みによるくらいのことである。

三 外出着

ってきた。 外出着も男性は洋服が多く、老人でも和服を用いる人が少なくな

江戸褄・留袖など、また前記の着物で、葬式には、黒一色に身を包明るい美しい訪問着を青年は振袖などを用いる。祝意の式のときは、女性は、冠婚葬祭のときは和服を用いる人が多い。冠婚祭には、

み、白足袋だけが強く目をひく。

粧い、イヤリングなどである。化粧も葬婚によって異なり、特に若い女は口紅・アイシャドウを

外の外出着のファッションは、どんなものが流行するか予測は出来総じて、儀式用の変化は変革の歩みも遅々としているが、それ以

ない、都会も山村も全く均一な服装の時代ではないだろうか。

婿は紋付羽織袴から、モーニングに変わりつつあるといってよいでエディング・ドレス以外はまだ旧慣を保持しているようである。花花嫁の姿にも、親の娘を思う心の表現服装であったため、一部ウ

四髪型

あろう。

と壮年期そして老人期によって、それぞれの特質を持っている。髪とその結い方にも時代が表われている。そのうちでも、子供期

子供期

- ① 唐子朝という。頭頂から半分位まで毛を残し、中央から下はでまた、この毛は子供がころんがとき、地蔵様がおこすとき手をな体の一部を保護するためだといっていた。頭頂の毛は少し長な体の一部を保護するためだといっていた。頭頂の毛は少し長な体の一部を保護するためだといっていた。頭頂の毛は少し長な体の一部を保護するためだといっていた。頭頂の毛は少し長な体のででは子供がころんがとき、地蔵様がおこすとき手をまた、この毛は子供がころんがとき、地蔵様がおこすとき手をまた、この毛は子供がころんがとき、地蔵様がおこすとき手をまた、この毛は子供がころんがとき、地蔵様がおこすとき手をかけるためだとの俗信もあった。
- って頭上で結う。 部を頭頂で一まとめとし、それを左右二分して二つの輪をつく② いちょうがえしは、七歳から十三 ✔ 四歳ころに結う。髪の全
- それを後に垂れている。このとき二分して美しく二本に編み、③ おさげは、十三ℓ四歳以後に結う。全髪の毛を頭頂で結い、

リボンなどをつけているのは、愛らしい。

青壮年期

- 美しくする。いちょうがえしより、やや輪になった分が高く大に輪をつくり、その髪の先をもとに結い、色物のカセをかけてい。もも割れは未婚の娘が結う。頭頂で集めた髪を二分して左右
- す人もいるが、この起こりは、稲穂なのである。をつける。島田髪に美しいカンザシや花(藤の花の造化)をさが結う。花嫁はこの髪を高くした高島田に、アゲボウシ(魔垣)の。島田は「日本髪」の代表といわれる美しいもので、未婚の娘

られた。

- 表現である。
 「島田くずして丸髷に」というのは、娘から妻になったというはオハグロを塗った。カツヤマという髪で、島田に似ているがのまげは既婚の婦人が結い、人妻であることの公示で、古く
- 流行した。 たもので、大正時代に花嫁もこれを結った。学校の教員に一時たもので、大正時代に花嫁もこれを結った。学校の教員に一時 東髪は、髪を頭上で一まとめにして美しく大きな輪にたばね
- 行方不明は、大正十二年九月一日関東大震災後に流行した。● 行方不明は、大正十二年九月一日関東大震災後に流行した。
- ⑥ オールバックは髪をまとめて、前に丸みをつくりながら後に

出した。非常に活動的な人によく、波も長持ちし、手入れも簡じらせて、美しくすることである。昭和二十二年頃から流行しでという。永久の波を持つ髪という語意で、電熱で髪の毛をちまとめたもので、このとき七分三分か半分に分ける女もいた。

昔の男の髪の形に似ているので、いつとはなしにこの名がつけ⑧ 男髷は凶事のとき近親の婦人が結うので、葬式髷と称した。

単であるため婦人に喜ばれている。

高価になっても決して衰えることはなく、益々豪華になることであたいのは婦人の本性である。時代とともに髪型が変わり、結い方がたいのは婦人の本性である。時代とともに髪型が変わり、結い方がり、と表の結い方の大体のことを記したが、これについての髪飾りり上髪の結い方の大体のことを記したが、これについての髪飾りのう。

第六節 芸 能

、柳津歌舞伎

九年春に結成した。団長佐藤浩を中心として歌舞伎の練習を熱心にろである。そのうちで歌舞伎上演の同志が集まり、好美団を昭和十わが町は文芸の町ともいうほど、文学や芸術への関心の高いとこ

尾太夫、

静香太夫の二人で、

大道具と衣裳類は全部日光中村座から

=

芸

題

太功記十段目

武智光秀

その他

判人源六 寺岡平右ヱ門 した。 行い、 に充分こたえたいと熱演した。その後も昭和二十六年まで数回上演 たりして熱狂し、声をかける人、拍手を贈る人で、出演役者もそれ 満座は超満員となった。役者が家族であったり、 各自の技量はすばらしく熟達し、初演は昭和二十年正月で福 親族・知人であっ

明治末期に結成され、当時度々上演して好評を博していたいきさつ 津歌舞伎は育ったことを忘れることはできない。 もある。こうした三十余年の地芝居が苗圃となっていたために、 地芝居として、先代の長谷川美材(芸名・花川美香)を総帥として、 ないとの激賞を受けた。こうしたことはその歴史を考えると、 年にも西方で上演し、その技量水準の高さは、素人歌舞伎と思われ その他に、 隣町の三島町立西方中学校校舎落成式祝賀の昭和二十三 柳津

に出演し、 団員は非常な感動を受けた。好美団はその後も郷土民芸コンクール 昭和二十四年三月三十一日当時の町長笠間恵氏より感謝状を贈られ、 柳津好美団は、 ってよいのである。 不幸にして柳津小学校は、 度々表彰を受ける等、 一日もはやく小学校の復興を祈念しての活動に対し 昭和二十一年二月二十二日全焼した。 地文民芸に多大の貢献を尽したと

との歌舞伎の指導者は、 日光中村座々長松本染亟師、 義太夫は浅

借用して実演したのである。 幸に当時上演の役付名が残っているので、それによって記してお

> , 芸 題 仮名手本忠臣蔵 (三段目より七段目)

塩谷判官 大星由良之助 佐 藤 藤 田 浩 茂

おかや 遊女おかる 大星力弥 後藤

同

妙子

同 同 人

一文字屋お歳

石堂馬之亟 早野勘平 Щ 長谷川美材 同 名 睦

先崎弥五郎 薬師寺次郎ヱ門

先崎 二瓶 初子 秀二

上瓶

鷺坂伴内 斧定九郎 下破数右ヱ門

同

百姓与市兵衛

長谷川明水

崎 同 徳衛 人

長谷川美材

175

く。

							四、芸題								三、芸題						
春藤玄藩	よだれ人り	菅秀歳·小太郎	女房戸浪	式部源蔵	女房千代	舎人松王丸	管原伝授手習鑑(寺小屋の段)	その他	お君	袖萩	浜夕	賢杖	安部宗貞	桂中納言(実は安部貞任)	奥州安達ケ原三段目	加藤正清	真柴久義	嫁初菊	一子十次郎	母さつき	妻操
同人	藤田茂	田崎紀勢子	山名睦	長谷川美材	田崎徳衛	佐藤浩			二瓶 雪子	田崎徳衛	藤田茂	先崎 秀二	山名睦	長谷川美材		二瓶 啓一	鈴木 栄二	佐久間京子	山名睦	藤田茂	田崎 徳衛
源義経	一与敦盛	熊谷直実	七、芸題 一の谷嫩軍記(熊屋陣屋)	その他	干松	鶴千代君	荒獅子・男之助	八岁	栄 御前	外記左ヱ門	細川勝元	仁木弾正	六、伽羅先代萩(床下の場・刃傷の場)	その他	仝 少将	大磯の虎	朝比奈三郎	仝 五郎	曽我十郎	工藤祐経	五、芸 題 吉例寿曽我対面
鈴木 栄二	後藤 妙子	佐藤浩			田崎紀勢子	二瓶雪子	先崎 秀二	長谷川美材	藤田茂	佐藤 忠助	山名睦	佐藤浩			二瓶初子	橋本 新一	先崎 秀二	山名睦	田崎徳衛	長谷川美材	

石屋の弥陀六

田崎 徳衛

そ の 他

藤の局

佐藤 忠助

1

八

上演場所

柳津本町

福満

座

芸題七種の上演者は、口上をまず暗記しなければならない。口上

書文を懐に入れて、田畑・山仕事の往復には声を出し、節をつけて

練習した。風呂の中は勿論、

便所でさえ演習するという熱心さであ

は美しく咲いたのである。たからこそ、この山里に歌舞伎の花たという。その真面目さがあったからこそ、この山里に歌舞伎の花いるときの真剣さは、知らぬ人は気の狂った人と見ることさえあっ義太夫にのせて合わせなければならなかったので、独り練習をしてった。口上の次は「振」である。一投手・一投足・首の動かし方は、

一、久保田地芝居

氏で多大の犠牲を払った。冬季間の仕事を殆んどなげうって、役付は、大郎の歌舞伎と異って、地区の人々が自ら歌舞伎役者となって、中間に柱を建ててなかった。これは、この拝殿となったからである。中間に柱を建ててなかった。これは、これは、これに、二十三度の歌舞伎を実演した。これは、中間に柱を建ててなかった。これは、田口五間の大梁で支えられて、中間に柱を建ててなかった。と季間の仕事を殆んどなげうって、役付とで多大の犠牲を払った。冬季間の仕事を殆んどなげうって、役付とで多大の犠牲を払った。冬季間の仕事を殆んどなげうって、役付とで多大の犠牲を払った。冬季間の仕事を殆んどなげうって、役付にで多大の犠牲を払った。冬季間の仕事を殆んどなげうって、役付とで多大の犠牲を払った。冬季間の仕事を始んどなげうって、役付にある大の犠牲を払った。冬季間の仕事を始んどなげうって、役付にで多大の犠牲を払った。

者で、一種類の芝居ならまだしも三種類の芸題を演出した。舞を習った。とのときの指南は、耶麻郡加納村の中村芝道という役人物の台本による口上を覚え、更に口上の暗記ができると振付の仕

このときの芸題を記すと、忠臣蔵・先代萩・一ノ谷嫩軍記などである。このころ演出した人が現存している。鎮守祭礼のとき、最初ある。このころ演出した人が現存している。鎮守祭礼のとき、最初に建てた小学校の落成式の大正六年九月祝賀に上演した。大小道具、たりつかぬ冬の中、誰一人家内の者から不平や苦情をいわなかったという。いよいよ当日になると、田代・松ケ下、牧沢・四ツ谷・湯という。いよいよ当日になると、田代・松ケ下、牧沢・四ツ谷・湯という。いよいよ当日になると、田代・松ケ下、牧沢・四ツ谷・湯という。いよいよ当日になると、田代・松ケ下、牧沢・四ツ谷・湯という。いよいよ当日になると、田代・松ケ下、牧沢・四ツ谷・湯という。が芝居見に参集した。観覧者は酒肴を持ちより、掛声をかけ、拍ちが芝居見に参集した。他に娯楽機関のないときなので、こよない娯楽であった。

そのときの芸題と役割を示しておく。

一、芸 題 伽羅先代萩

細川勝元

佐藤松太郎

鬼仁木弾正

江戸家老

山内 孝市

山内 爲男

177

百 姓 佐藤	定九郎 山内	與市兵衛佐	″ 山内	一力屋番頭	おかるの母 佐 荘	おかる木ノゴ	大星力弥 佐 芸	" 佐藤	塩屋判官 山内	本 蔵 山内	大星由良之助佐藤	芸 題 仮名手本忠臣蔵	千松佐藤	鶴千代佐藤	殿医佐藤	腰元木ノ戸栄伍	栄 御前 佐藤	八岁佐菇	政岡佐藤	花道弾正 角田	松前鉄之助山内
恒次	爲男	藤豊	爲男	彦弥	藤信	木ノ戸栄伍	藤登	佐藤喜三郎	幸市	爲男	恒次 一、仮名手本忠臣蔵		登	栄八	信三、芸題		恒次	藤貢	豊豆	彦弥	爲男
鷺坂坂内	"	村人	斧定九郎	与一兵衛	"	万屋	お軽の母	お軽	M°	塩谷判官	臣蔵	たが、役付は不明になった。	角田定太郎・佐藤豊次・佐藤伝作・その他で上演し	菅原伝授手習鑑	平内	九太夫	石堂右馬之亟	本蔵娘	早野勘平、本蔵妻	百 姓	
佐藤信	佐藤 栄八	佐藤 恒次	山内爲男	佐藤豊	山内 爲男	角田 彦弥	佐藤信	木ノ戸栄伍	佐藤喜三郎	山内 孝市				伝作・その他で上演し		佐藤 勝衛	佐藤松太郎	角田 彦弥	佐藤喜三郎	佐藤豊	佐藤 栄八

=

伽羅先代萩

片桐勝元

荒獅子男之助 仁木弾正

山名宗全

1/1 政

栄 御前

藤

登

Ŧ

平衛内 九太夫 仝の娘

本蔵の妻

佐 佐

豊 貢 大星由良之助

佐藤

栄八

恒次

石堂馬之亟

角田

彦弥

佐藤喜三郎

早野勘平

佐

藤

豊.

加古川本蔵

山内

爲男

佐

鬼

面

江戸家老

山内 山内 角田

孝市

花道弾正

腰

元

木ノ戸栄伍

彦弥 爲男

大星力弥

佐藤 佐藤松太郎

与えられた時代である。

角田 彦弥

佐藤松太郎

仝

佐 藤 豊 貢

佐藤 恒次

栄八

佐藤

勝衛

里望

神ゥ 楽 (田代神楽)

太郎・佐藤豊次も参加した。

三、菅原伝授手習鑑には、右の人たちのほかに佐藤伝作・角田定

提供による。

右役付は、当時出演した佐藤勝衛氏長男の次男氏の

今から八十年ほど前に神宮正遷宮があった。非常な敬神の感動を

厭い風紀の乱れなど各地に発していることを知り、久保田のこの山 ず拠金し、特志寄附者も案外に多く必要の道具は一式整えることが 議一決して準備にとりかかった。その経費は発案者佐藤亀太郎がま うべきことを考え同志に図った。予想以上の大賛成を得たので、衆 村の純風を守ろうとし、若人のエネルギー発散法として、神楽を行 て人心を薫化し、娯楽少なく当時賭博などの流行もあって、労作を できた。即ち、社壇・唐獅子・火吹男面・オカメ面・鐘鳩面・鬼子 人のこの感動を永く記念するために、一行事を起こし、それによっ 柳津町大字久保田にこのとき佐藤亀太郎という人がおられた。村

面・刀・手毬・挠・すり鉦・笛・三味線・竹棒などである。

る。 師を依頼して、猛特訓を続けた。 師として、 道具は揃ったが、芸能技量は誰一人保持していない。このため教 早晨から夜おそくまで、 当時著名な神楽師であった高田町近くの馬ノ墓村の神楽 各の受持とする技量収得に専念した。 稽古所は、 佐藤亀太郎氏小舎であ

棟梁(俗に亀太夫)

佐藤亀太郎

星

常

笛

角田

定次

大太鼓·小太鼓

天野 新作

佐藤

鉦

天野 新作

獅子舞

佐藤 子守

藤 信

木ノ戸栄伍 佐藤周三郎

(現存)

オカメ舞

佐藤 四郎

鐘鳩舞

木ノ戸栄伍

小物係

藤 貢

佐藤 子守

楽の奉納は鎮守祭礼と特に山神祭日には、 などとなって、一人一芸が二芸収得をした。若人の情熱での練習を した結果は、素人とは考えられぬ見事な芸を行うまでになった。 村人の娯楽としては最高のもので、ヤンヤの喝采を送った。 真魂をこめて舞をしたの

> 明るくそして、浮々とさせはげみを与える調べなのである。 衛氏の許に保管している。里神楽のあの賑わしい音曲は、人の心を ある年の余剰金は各人に分配したこともあるが、記録によると、一 を披露し、 人配当金五十六銭であった。こうして毎年の奉納を続け、しばらくた って奉納舞は途絶したが、当時の用具一式は現存し、大切に佐藤幸 この評判は、当時近隣の村々にひろがり、 それによる収入はほとんど用具の購入に充てて行った。 請わるままにその妙技

神宮から祈祷札を戴き、それを社壇前面に掲げている。神楽は神を 獅子の際の歌には、古事記の天ノ岩戸開きを強調としていること、 悪魔退散をし、 お慰めすることが主意であったが、それとともに、唐獅子によって 才」などで長い夜を楽しんだ。 夜は寄などと称して、長時間との音曲と妙技と、そして笑を催す「漫 鐘鳩舞の剣の舞などは、こうした意味を含んだ舞なのである。 里神楽は神楽系統から見ると、伊勢神楽なのである。伊勢の皇太 会津地方は、 明治中期ころから村々で春神楽と称し、昼は平ぶち 五穀豊穣と家内安全を祈願する神事なのである。長 神楽は、 雪国会津に春を告げる風物

四 櫓 踊

詩であった。

締め、 盆踊りを行った。夕食を早くすまして、浴衣を着、帯の美しいのを 明治・大正の頃はお盆になると、七月十五・十六・十七日の三晩 赤緒の草履か下駄を履き、真新しい盆手拭を頬冠りして、鎮

われている あった。この盆踊りは、江戸時代の寛政ころから盛んになったとい 夜遅くまで踊った。月はまんまるの望月など、踊りあかすことさえ 守や寺の前に集まり、太鼓と笛と音頭とりにあわせて、手振よく、

集落が多く、まだ組櫓をもち、盛大に櫓踊りをしているのは、 古い風習の一つなのである。 持つ人も応分の寄附をして、 の各戸では、花という御祝儀も贈る。 ライマックスになるという。歌詞も民俗の部に出した独得の旋律に て大きさを広げ、二十日の月に照らされて踊る人、見る人の心はク のって、掛声勇ましくなる。見ている人も踊りの輪にだんだん入っ 櫓の上の鳴物たちは酒の酔もまじって勢を増すと、踊り子も囃子に ける人々で、あの分校前は立錐の余地がない。だんだん興に乗り、 に立派な組櫓をしつらえ、他の集落からも踊りやそれを見物に出か 青年会の八月二十日で、この夜の踊りは有名である。郷戸分校校庭 ので、活気をみせることもあるが、大方はこの踊りは消滅している 日盆に繰り下げたり、または鎮守の秋祭りのときに踊るように変化 三日の中の一日を一定の集落にして輪番に踊ったり、あるいは二十 せて謡い、 しかし、各部落一斉に踊ったのでは、大きな輪にもならないので、 近頃は若い青年も少なくなり、 近所の踊り子のたくさん集まるように踊日を調整したようであ 左廻りの大櫓踊りを演ずる。 との行事に経済的な参加をするのは、 古い時代は朝踊りもあったが、現在は 他郷にいる人々が盆帰りをする 商人でもこの集落を得意客に この年中行事には、 郷戸

> 取締りもあるので、大方は午前零時近くで終わることにしている。 なおこの櫓踊りの現存しているところは、郷戸以外に、

にも左記の表のようになっている。

大 集 四 黒 久 砂 琵 Ŧī. 湯八木沢 落 " 保 子 琶 成 畳 名 沢 田 原 湖 沢 敷 谷 9 月 15 · (祭) 日 9月 15 · (祭) 8 月 15 · (盆)日 8 月 14 · (盆) 8 月 15 踊 0 · 盆日 日 櫓 組 組 組 組 組 組 形式 妅 立 立 木 立. 立. 笛鼓(大小) 笛鼓(大小) 盆鼓(大小) 笛 (大小) 盆鼓(大小) 囃 子 左廻り 左廻り 左廻り 左廻り 左廻り 廻 の方 伝承型 伝承型 伝承型 伝承型 踊り方 伝承型 仮装賞等 実 実 実 実 実 仝 現 中在 止 は 施 施 施 施 施 中 中 中 中 中

三地区は、 現在は実施していない。それは、

右

踊る若者の減少。

Π, 秋祭りの統一のため招待者が少ない。

踊り場としていたところが、子供の遊戯場に改装して狭く

なり踊る場所がない。

伝承娯楽として遺しておきたい。 などのためと思われるが、 ニ、TVなどの娯楽時間があって、 現存するところは、 必要感が弱くなった。 郷土の芸術、農民の

~郷戸ナア踊りに去年もきたが

忘れられずにまたも来た

へ郷戸ナア五ケ村お米の出どこ 煙草どころでホップどこ

へわたしゃナア他所から踊りにきたが

へおれのナア若いころ二十三、四は

へ盆がナアきたとてゆかたをくれた

へ踊りナアつかれてねたものの

べ若いナア同志は内輪でおどれ

親は外輪で嫁さがす

今よい踊りはその美人

~ 添うてナアみたいな小巻の娘

へ黒沢ナア娘は色黒なれど 村の若衆はご見物

味は柳津のあわまんじゅう

山の木かやもなびかせた

あついあの人湯八木沢

郷戸ばやしでまたおどる

へ田代ナア娘は美人がそろう

へ惚れてナア通えば千里も一里 あわずかえればもと千里

へかせぐナア女をさがしてみたら

、嫁にナアくるとき枕紙もつは 紙の在所のあの嫁御

~ 踊りナアおどらば今晩かぎり

^ 道のナア小草に米なるときは

あすの晩からかごの鳥

山の木かやに金がなる

へそろたナア揃たよ踊り子がそろた

稲の出穂よりよくそろた

へ月のナア出あいと夜はさだめたが 月ははよでて森の影

気だてやさしく色気ある

へ高いナア高森よく名をつけた

漆峠のうえじゃもの

へ貰うてナアしあわせ柳津の女 福満虚空蔵で黄金たまる

へ藤とナア椿に似た娘がおどる

しなもよいのですぐわかる

麻生野老沢でかせいだ娘

182